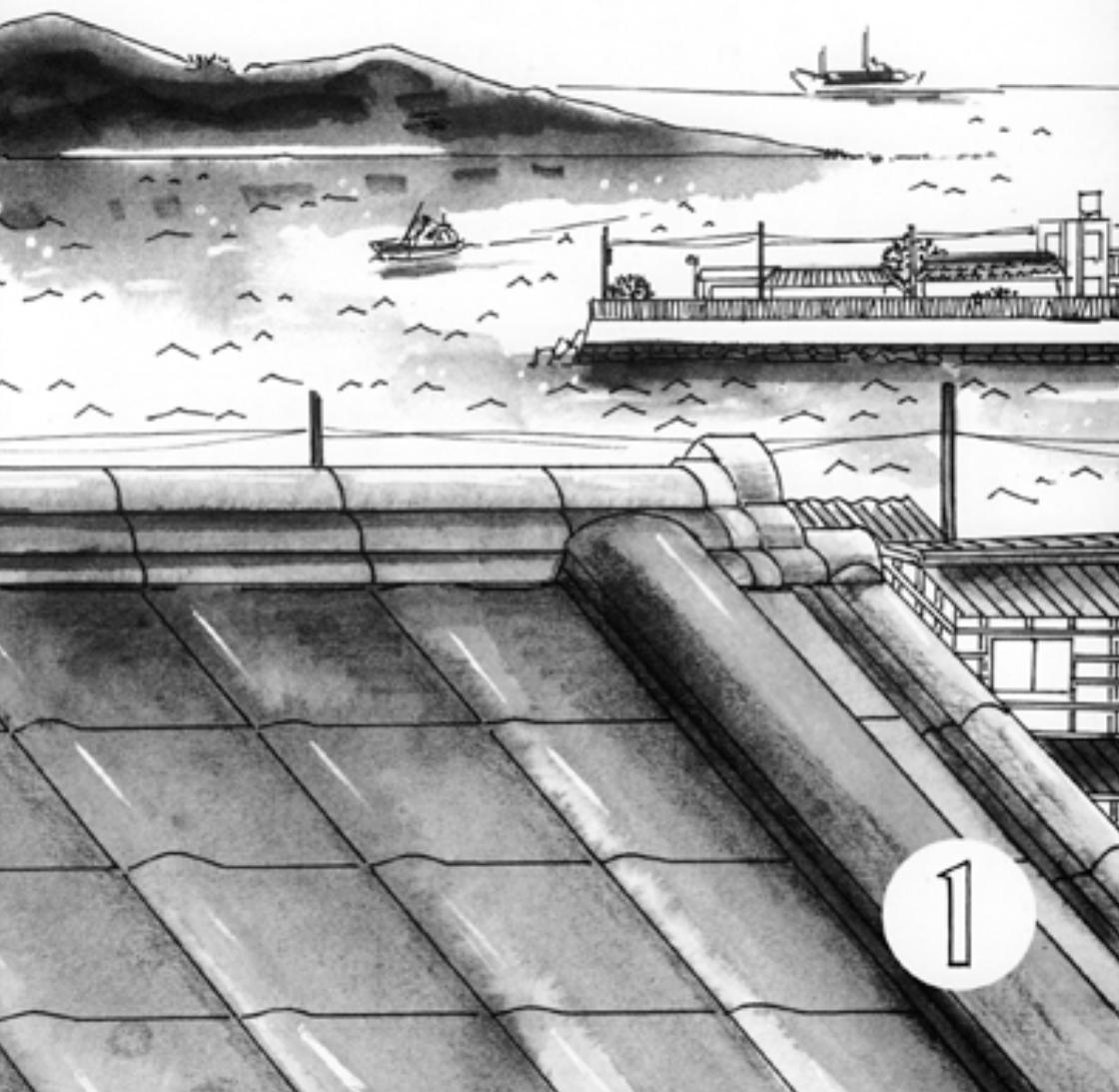


令和2年1月5日発行(毎月5日1回発行)  
第60巻1月号(通巻726号)

# 風土



1

## 雪煙が消す〇51とその後尾

(句集『高蘆』より昭和四十七年作)

桂郎師は盟友の齋藤玄の句集『玄』出版のお祝いに北海道へ旅立っています。齋藤玄は西東三鬼、後に「鶴」の石田波郷に師事し、桂郎師とは俳句を語り合う友でした。齋藤玄は北海道に住み、俳句誌「壺」を主宰していました。この句には「網走へ」と前書があり、『玄』を祝ったあと、網走へ足を延ばしたのです。そのころはまだ〇51がラッセル車として活躍していました。雪煙に車両ごと消されるところに北海道の雪深さが伝わってきます。

## 風邪籠り留守居のごとし箸茶碗

(句集『高蘆』より昭和四十七年作)

網走への旅は流水を見るためです。恐らく生まれて初めてでしょう。沖から次々押し寄せて来る「流水」に、この世とは思えぬ感動を受けたのです。この「死装束」と言うのは自らのいでたちを喩えたものです。厳寒の時期です。防寒具に丸々と膨れている桂郎師を想像します。もしここで凍死したらこれが死装束だと眩いているのです。

## 初日さす大竹藪の青しぶき

(句集『貴椿』より平成十二年作)

器師の「命ふたつ」は、吾と対象の関係の中でいかに対象の本質に迫り、いわゆる「相手のいのち」を輝かすかと言う表現意識が核にあります。ここでは初日を浴びた「大竹藪」がその対象となります。「大竹藪」が一斉に風に波打っている様子をどう表現したらいいか。器師は初日にさわざわと波立つ「大竹藪」が飛沫をあげていると感情移入したのです。「青しぶき」のことはを得ることで元日の「風の大竹藪」のいのちを輝かせたのです。

## 八荒の白波とどく浮御堂

(句集『貴椿』より平成十二年作)

「八荒」は比良八講と言う延暦寺の法会の前後に琵琶湖の周辺で荒れる冷たい風のことです。「比良八講」は現在三月二十六日に行われています。このころの風はまだ冷たく、比良山からの吹き下して琵琶湖も波立ちます。器師は堅田に赴き、八荒の白波に洗われる浮御堂に佇んだのです。この浮御堂から少し離れた湖中に虚子の句碑「湖もこの辺にして鳥渡る」が建っています。

鍬の音  
南うみを

速達が畦の蝗を飛ばし来る

素十忌の刈田の畦のあをあと

見えぬ火が粃殻の山のぼりゆく

柚子梯子掛けんと幹をふた巡り

あめんぼう秋の池面の広すぎる

畑 茸 よつてたかつて吐かさるる  
吾 亦 紅 折るやばうばうたる故郷  
くわつと指嚙まれさうなる石榴もぐ  
石 当 て て 秋 の 名 残 り の 鋤 の 音  
躍 り つ つ 透 き ゆ く 蕪 茹 で に け り  
う しろ 手 に 小 春 の か ら す 畦 伝 ひ  
焼 藪 を 割 り 難 問 に 額 寄 す



# 竹間集

同人作品



句 座 浜 福恵

朱筆のごと現るるや定家かづらの実  
お遍路に答へて冬の花わらび  
万年杭段畑の空澄みわたり  
神送る磯に芥を焼く煙  
塞の神の杜の手入れや神の留守  
剪定のごろりごろりと猿茸  
さるのこしかけ机上に十一月の句座

豊の秋 門伝史会

弾み来る生徒の列や豊の秋  
鳥渡る古民家回廊むかし道  
古民家に二胡のライブや花カンナ  
一步登れば神に一步や薄紅葉  
手渡しに貫ひし木の実ほのぬくし  
足音の吸ひ込まれゆく虫の闇  
ゆつくりと言葉さがして林檎剥く

釣瓶落し 鈴木石花

萩刈られ真円大き思案石  
喉越しに新蕎麦の香や一茶庵  
賜りし新作和菓子胡桃の香  
釣瓶落し先は地獄か天国か  
拙句入賞不意の報あり秋の空  
颱風去る宴の海と空一枚  
晚餐会果てし二人に秋の風

冬さうび

山田 暢子

朝霧の濃ゆきところは川流れ  
人違ひされて会釈の冬帽子  
年金で生きる暮らしに冬さうび  
大櫂枯れても空を支えをり  
金色の小鳥舞ふごと銀杏散る  
炉燵には無縁のままに老いにけり  
鳥渡る関東平野に日の残り

栗御強

岩木 茂

桐一葉水平線を過ぎりけり  
秋風と来て秋風を見失ふ  
台風が兜太の臍の上過ぐる  
天高しラガー吼えたる競技場  
大熔岩の影倒れくる捨案山子  
竹皮に丹波を包む栗御強  
鷹柱立つや天皇即位礼

草の露

林 いづみ

石庭の砂紋流るる十三夜  
箱根路の萩の名残に会ひ得たり  
ひとむらの芒いざなふアプローチ  
庭紅葉漆の卓に映りをり  
クリスタル玉の音符の草の露  
秋声や子規の病臥の部屋に坐し  
香合に文殊菩薩や豊の秋

直哉旧居

小林 共代

沼は今水八景に澄むみかり  
一声もなき秋燕や沼たひら  
木の実降る古墳の眠る高野山  
軒低き直哉旧居やいちどと跳ぶ  
石路の花直哉の佇ちし石の庭  
石庭のかそけき音や枯蟻螂  
ハケの道東西にのび小六月

# 山河集

同人作品



南うみを選

小鳥来る吉野は雨の向かう側

上迂 蒼人

稲架襖丸みを帯びて来りけり  
田の神の長居してゐる豊の秋  
首伸ばし立ち上がりゐて葛の花  
流れ来るまだ新しき貝割菜

足弱をわらふがごとく通草裂け

十井 ゆう子

佐渡へ来て洋上泊り星月夜  
玻璃越しの朱鷺と眼の会ひ秋日和  
秋うらら揺れてはしやぎてたらひ舟  
島人とテープの別れ秋の航

スカイツリーでつぺん揺れて神の留守

岡本 尚子

稲雀 三日天下の城の跡  
鯖道に比良の伏水稲雀

洗濯機で回してしまひ木の実独楽  
非常袋に犬猫の餌台風裡

天と地の蔓たぐり呼せ種を採る

森田 節子

大小の足跡沈む甘藷畑  
爽やかや透けて香の立つ匏屑  
草紅葉入り日のいろも加はれり  
後の月木曾にあがなふ黄楊の櫛

天高し口引き結び馬上の子

谷田明日香

笛の音の鎖もりゆくやすすぎ原  
柿照るや法被の子らのぞろぞろと  
秒針を刻むごとくにすがれ虫  
山茶花の散りて暗渠へ流れゆく

紀伊の国

池田光子

弓始一矢刈田に突きささる  
木の国の杉葉で点すどんど焚  
たゆたうて貸切りボート春を待つ  
ペリカンの大きな嘴花疲れ  
花菜風玉葱小屋を素通りす  
筍を獲物のやうに並べ置く  
口がよくまはる子でありつばくらめ  
下校児の列に乱人熊ん蜂



---

玉葱と農婦の頬と光りあぶ  
かたつむり迷ひ一つを持ちつづけ  
紀の国の青柿すでに角を持つつ  
入れてより震えどほしやたもの鮎  
つくつくしつんと鼻つく松の脂  
手を入れてぬか漬ぬるき広島忌  
秋夕焼ゆすぶり進むコンバイン  
稲架の馬あらふる雨に踏んばつて  
彼岸花戦果てたるやうに消え  
青空へ干柿の千発光す  
鋸屑を日差しに散らす冬至かな  
しつけ糸しづかに抜きぬ去年今年

初桜

小原芙美子

癒えし身に山河ありけり初桜  
春志へ襦袢を干せる軒端抜け  
水かげろふみつづけてをり春障子  
水番の茅花揺らして畦をくる  
小満の水のとぼしる芋車  
新茶てふみどりのしづくふみけり  
栗の花みだらなるまで咲きにけり  
楠葉落つ糺の森のかがやきに



---

冷やしトマト潮垂れの手でかぶりつく  
螻蛄の怒りを子らの囃したて  
流さるる蜂や野分の戻り風  
補陀落の海へ笛の音秋祭  
湧水の新酒を提げて帰らむか  
昇降機冬夕焼をのぼりゆく  
しぐるるやきのふの梯子そのままに  
綿雪の耳輪のやうに耳に触れ  
大根焚食ぶや芯まで琥珀色  
七種を鈴ふるやうに諳んじて  
初弓や二十歳の空へ引きしぼる  
みささぎは固く錠さし寒の梅

# 風土独語／南 うみを



稲架襖丸みを帯びて来りけり

上辻 蒼人

「稲架襖」は稲木に何段も稲を掛け襖のように見えることから言います。この句のポイントは「丸みを帯びて」で、天目を吸って稲が膨らんできているのです。これがおいしさにつながります。米作りの作者ならではの細やかな眼差しです。

キャンバスを飛び出す絵の具鳥渡る

川井さち子

この句は「絵が飛び出す」のではなく、「絵の具が飛び出す」のです。例えば絵の具の青が、そのまま空の青に繋がるような世界です。その青い世界を鳥が渡っていきます。独特の感性です。

秋うらら揺れてはしやぎてたらひ舟

土井ゆう子

「たらひ舟」は現在では観光用ですが、元は女性が波のおだやかな磯の漁に使いました。とにかくよく揺れます。揺れるけど楽しい。「揺れてはしやぎて」なのです。「秋うらら」も適切です。

白髪の腰なくなびく芋煮会

森屋 慶基

「芋煮会」は山形の秋の野外行事ですが、現在は各地に広がっています。老婆も加わっての河原での「芋煮会」でしょう。白髪

が風になびくのですが、「腰なく」にこの老婆の年輪を感じます。

スカイツリーのでつべん揺れて神の留守

岡本 尚子

陰曆十月は諸国の神々が出雲へと旅立ち、諸国では「神の不在」が続きます。この句の「スカイツリーのでつべん揺れて」は神の不在の不安感とも旅立つ神々が揺らすとも読めて面白いです。

風に立つ世捨ての貌のいぼむしり

岡 尚

この句、「いぼむしり」に感情移入して成りました。「世捨ての貌」から晩秋の枯れゆく「いぼむしり」を想像します。案外作者の自画像かもしれません。

大小の足跡沈む甘藷畑

森田 節子

俳句は最小限の言葉でいかに読み手の想像力を広げることが大事です。この場合「大小の足跡沈む」がそれにあたります。子供たちと大人が嬉々として「薯堀り」を楽しんだ足跡なのです。

括られし案山子見てゐる案山子かな

池田 光子

これも「案山子」に感情移入して作られたものです。用の済んだ案山子たちがぞんざいに括られているのを、稲田の案山子が見ているのです。「俺もいずれはああるのか」と呟くのです。

天高し口引き結び馬上の子

谷田明日香

俳句はまた読み手に見えるように作るのが基本です。「口引き結び」が、この「馬上の子」の緊張感また凛々しさを読み手に想像させます。秋祭の一餉かもしれませぬ。

# 風土集



## 南うみを選

手伸ばすや月の兎は指に乗り 焼津

川井さち子

キャンバスを飛び出す絵の具鳥渡る

「何か居る」洞窟風呂の冷やかさ

鳥渡る底の見えきて大井川

秋の富士に大鯨雲うづくまる

畝を盛る鍬音律の調べかな横手 取手

森屋 慶基

白髪の腰なくなびく芋煮会

確かなる母の歩幅や十三夜

泡立草後生大事に惚けし母

箕に扇ぐ小豆寸暇の母なりし

山あひの陶土の村の初紅葉 相模原

岡 尚

物忘れ増えてもどかし秋扇

ぐい呑は備前火襷温め酒

風に立つ世捨ての貌のいぼむしり

走り蕎麦手ざはり荒き伊賀の猪口

括られし案山子見てゐる案山子かな 岩田

池田光子

暮れ早し煮魚泡立つ落し蓋

曼珠沙華からくりのごと消えにけり

紀の川のきらめきに吊る平枝柿 ひらたねがき

日溜りを握る形に吊し柿

すぐそばに小鳥来てをり身じろげず 神奈川

石井 秀一

鶏頭の種はびつしり欲しいまま

衣被酔ひはしづかに来るものよ

まざまざと畦見え始め田仕舞ひす

駅を出て人散り散りに十三夜

灯を消すや扉より入り来る今日の月 いわき

平井 改子

秋出水夜のサイレン鳴りつづく

御堂にもずかと入りこむ秋出水

扇置く古き箆笥の小抽出

バス停の脇に育てて菊の花